

松下幸之助記念財団 研究助成
研究報告

【氏名】 小島庸平

【所属】(助成決定時) 東京大学大学院

【研究題目】 農村部における回転型貯蓄講(RoSCAs)の国際比較
—日本の無尽講とジャワのアリサンを事例として—

【研究の目的】

回転型貯蓄講(Rotating Savings and Credit Associations=RoSCAs)とは、複数のメンバーが一定額の資金または米などの現物を拠出し、その総計を借り受ける者をクジ、競り、またはローテーションによって決定するという、インフォーマルな金融組織の一つである。日本では無尽講・頼母子講などと呼ばれ、かつては農村部における極めて重要な資金調達・資産運用の選択肢の一つであった。こうした回転型貯蓄講は、現在の日本では一部の地域を除いてほとんどが消滅しているが、今なお広く世界的に見られるものであり、近年のアジア・アフリカ諸国におけるマイクロファイナンスへの関心の高まりもあって、多くの研究者の注目を集めている。本研究では、戦前日本の無尽講に関する一次史料を利用した分析を踏まえて、地域社会の構造と回転型貯蓄講の関係に着目しつつ、インドネシアのRoSCAsであるアリサンの分析を行うことを目的とする。

【研究の内容・方法】

戦前日本の救済講は、経済的苦境に立たされているメンバーが最大の負債を無担保・無利子で借り入れることになるため、講破綻のリスクが相対的には高い。したがって、被救済者の保証人となる加入者の信用力が重要であり、名望家的な上層農が保証を引き受けることが多かった。これに対し、ジャワのアリサンでは困窮者がより多くの資金融通を受けることになるため、同様に講破綻のリスクを抱えることになるが、貸付金額は小さく、デフォルトによる損失はメンバー全員で分担することが相対的には容易である。こうした日本とジャワの回転型貯蓄講の形態的差違は、被救済者の保証をなすべき上層農の成長とかかわりがあると考えられる。加納啓良は、戦前日本農村と現代ジャワ農村の最大の差を、地主に代表される上層農の成長の度合いから説明しているが、十分な信用力のある上層農の存在如何が、回転型貯蓄講における救済的性格の強弱を規定している可能性がある。以上の仮説を念頭に、日本とジャワのRoSCAsに関する比較研究を行いたい。

調査の方法は、申請者が2011年4月に中部ジャワのジョクジャカルタ特別区ワトゥガジャ集落で実施した方法を基本的には踏襲する。すなわち、集落内における全アリサンの代表者と会計担当者の2名を集落長宅に招き、事前に準備した調査票に基づく聞き取り調査を実施し、アリサンの運営方法と加入者の性格を把握する。さらに、アリサンの記録台帳を借用して複写し、時間をさかのぼって貸借と運営の詳細について検討を行う。

【結論・考察】

上記調査から、次の3点が明らかになった。

第一に、アリサンでは掛金の一部をグループの基金(Social Fund)として積み立て、不時の入院をしたり家族を亡くしたりしたメンバーへの見舞金支払いを行っていた。日本の無尽講ほど金額は大きくないとはいえ、インドネシアのアリサンも救済的性格を有していると言える。第二に、アリサンでは積み立てた掛金をメンバーに一定の利率で貸付を行っており、その貸付を受けているのは政府の支援米を受けている貧困な世帯の方が多かった。しかし、第三に、農地を貸し付けている世帯ほどアリサンからの借り入れが多いことも判明し、この点は上記の貧困世帯ほど借り入れが多いという事実とは必ずしも整合的ではなかった。今後、非農業的な就業行動とアリサン金融との関係を検討する必要のあることを示唆するものと言える。